

高岡町埋蔵文化財調査報告書第11集

高岡町内遺跡Ⅳ

1996. 3

宮崎県高岡町教育委員会

正誤表

高岡町内道路Ⅳ

| 頁 | 訂正箇所 | 誤 | 正 |
|----|--------------------|-----------|-----------|
| 11 | 14行目 | ベットタウン | ベッドタウン |
| 34 | 表3根原下から4段目 主な遺物 | 縄文式土器 | 無 |
| 34 | 表3根原下から4段目 主な遺物 | 縄文式 | 縄文式土器 |
| 34 | 表3城ヶ崎第5地点 主な遺物 | 土器類 縄文式土器 | 無 |
| 34 | 表3城ヶ崎第5地点 主な遺物 | 無 | 土器類 縄文式土器 |

高岡町埋蔵文化財調査報告書第11集

高岡町内遺跡IV

1996. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序 文

高岡町は、宮崎市の近郊に位置し、大規模な諸開発の増加が予想されます。高岡町教育委員会では、これらに対応するため、調査体制を整えるとともに、1991・1992年度に実施した町内遺跡分布調査の結果をもとに、開発に伴う遺跡の確認を目的とした町内遺跡発掘調査を実施しております。本書は、1995年度に実施したそれらの調査の報告であります。この調査が、開発と埋蔵文化財の保存とが共存しうるきっかけになることを希望します。

最後に、調査に御協力頂いた諸関係機関や地権者の方々に深く感謝申し上げます。

1996年3月

高岡町教育委員会

教育長 篠原 和民

例 言

1. 本書は、高岡町教育委員会が文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した町内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 高岡麓遺跡第6地点の陶磁器については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）から指導、助言を得た。
3. 調査は下記の体制でおこなった。

調査主体 高岡町教育委員会

| | |
|--------|---------------|
| 教 育 長 | 篠原和民 |
| 社会教育課長 | 岩崎健一 |
| 社会教育係長 | 本田正雄 |
| 庶務担当 | 社会教育係副主幹 丸山潤子 |
| 調査担当 | 社会教育係主事 島田正浩 |
| 調査担当 | 社会教育係主事 今城正広 |
| 調査指導 | 県文化課主査 永友良典 |

4. 調査ならびに報告書作成にあたっては、[REDACTED]（以上同係埋蔵文化財調査室）の協力を得た。

5. 本書の編集は島田がおこなった。



図版1 作業風景

目 次

| | |
|-------------------------------|------|
| Iはじめに | 7 |
| 1. 高岡の環境 | 7 |
| a. 地形的環境 | 7 |
| b. 歴史的環境 | 7 |
| 2. 調査の目的 | 11 |
| a. 高岡の開発について | 11 |
| b. 今年度の開発事業における対応について | 12 |
| II調査 | 13 |
| 1. 東高岡地区 | 13 |
| a. 城ヶ峰遺跡第5・6地点 (132) | 13 |
| 2. 高浜地区 | 15 |
| a. 榎原遺跡 (206) | 15 |
| 3. 穂佐地区 | 16 |
| a. 喜呂女木遺跡 (319) | 16 |
| b. 天正寺跡 (330) | 17 |
| 4. 去川地区 | 18 |
| a. 去川山下遺跡 (508) | 18 |
| 5. 内山地区 | 21 |
| a. 中原遺跡 (425) | 21 |
| 6. 浦ノ名地区 | 22 |
| a. 茶屋原遺跡 (613) | 22 |
| b. 久木野遺跡 (614) | 22 |
| c. 小山元遺跡 (616) | 23 |
| d. 一里山第1遺跡 (617) | 24 |
| 7. 飯田地区 | 25 |
| a. 高岡麓遺跡第6・7地点 (406) | 25 |
| 挿図目次 | |
| 第1図 高岡町内遺跡分布図 | 9、10 |
| 第2図 城ヶ峰遺跡第5・6地点位置図 | 13 |
| 第3図 城ヶ峰遺跡第5地点トレンチ配置図 | 14 |
| 第4図 榎原遺跡位置図 | 15 |
| 第5図 榎原遺跡基本柱状図およびトレンチ配置図 | 16 |
| 第6図 喜呂女木遺跡・天正寺跡位置図 | 16 |
| 第7図 喜呂女木遺跡調査地 | 17 |
| 第8図 天正寺跡調査地 | 18 |
| 第9図 中原遺跡位置図 | 18 |

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第10図 | 中原遺跡トレーンチ配置図ならびに基本柱状図 | 19 |
| 第11図 | 去川山下遺跡位置図 | 20 |
| 第12図 | 去川山下遺跡トレーンチ配置図ならびに基本柱状図 | 21 |
| 第13図 | 去川山下遺跡出土遺物実測図 | 21 |
| 第14図 | 一里山地区遺跡周辺図 | 22 |
| 第15図 | 茶屋原遺跡位置図 | 22 |
| 第16図 | 久木野遺跡位置図 | 23 |
| 第17図 | 小田元遺跡位置図 | 23 |
| 第18図 | 小田元遺跡トレーンチ配置図 | 24 |
| 第19図 | 一里山第一遺跡位置図 | 25 |
| 第20図 | 高岡麓遺跡周辺図 | 25 |
| 第21図 | 高岡麓遺跡周辺地形図 | 26 |
| 第22図 | 高岡麓遺跡位置図 | 28 |
| 第23図 | 高岡麓遺跡第6地点屋敷割図 | 30 |
| 第24図 | 高岡麓遺跡第6地点遺構全体図 | 31 |
| 第25図 | 高岡麓遺跡第6地点出土遺物実測図 | 31 |
| 第26図 | 高岡麓遺跡第7地点屋敷割図 | 33 |

図版目次

| | | | | | |
|------|--------------|----|------|---------------|----|
| 図版1 | 作業風景 | 4 | 図版17 | 中原遺跡第2Tr | 19 |
| 図版2 | 向屋敷遺跡 | 7 | 図版18 | 去川山下遺跡 | 20 |
| 図版3 | 橋上遺跡 | 7 | 図版19 | 去川山下遺跡第6Tr | 21 |
| 図版4 | 橋山遺跡 | 8 | 図版20 | 茶屋原遺跡 | 22 |
| 図版5 | 麻野遺跡 | 8 | 図版21 | 久木野遺跡 | 23 |
| 図版6 | 移佐城跡 | 8 | 図版22 | 小田元遺跡 | 24 |
| 図版7 | 高岡麓遺跡第1地点 | 8 | 図版23 | 一里山第1遺跡 | 24 |
| 図版8 | 城ヶ峰遺跡遠景 | 14 | 図版24 | 長野家武家門 | 27 |
| 図版9 | 城ヶ峰遺跡第5地点2Tr | 14 | 図版25 | 本古家屋敷内蔵 | 27 |
| 図版10 | 城ヶ峰遺跡第5地点3Tr | 15 | 図版26 | 高福寺墓地 | 27 |
| 図版11 | 城ヶ峰遺跡第6地点 | 15 | 図版27 | 高岡麓遺跡中心部 | 29 |
| 図版12 | 桜原遺跡 | 16 | 図版28 | 高岡麓遺跡第6地点 | 30 |
| 図版13 | 桜原遺跡第1Tr | 16 | 図版29 | 高岡麓遺跡第6地点出土遺物 | 32 |
| 図版14 | 喜呂女木遺跡 | 17 | 図版30 | 御仮屋兔図 | 32 |
| 図版15 | 天正寺跡 | 17 | 図版31 | 高岡麓遺跡第7地点 | 33 |
| 図版16 | 中原遺跡 | 19 | | | |

表目次

| | | | | | |
|-----|---------|----|-----|----------------|----|
| 表-1 | 確認調査一覧表 | 12 | 表-3 | 高岡町内遺跡IV報告書登録抄 | 34 |
| 表-2 | 高岡麓略年表 | 25 | | | |

I はじめに

1. 高岡の環境

a. 地形的環境

高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ1m~2mのチャートが見られる。

高岡山地西部には、古第三紀の四十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。

高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四十累層群を傾斜不整合に覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礁、砂シルトからなる冲積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。冲積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。

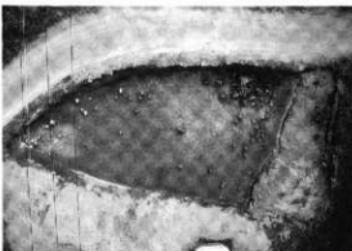
b. 歴史的環境

70%以上を山林が占める高岡町は、東に位置する宮崎平野と西に広大に広がる標高170m以上の台地の間に位置し、狭い冲積平野や谷、そして小丘陵に生活の基盤をおいている。このような山々や丘陵などを含めた大淀川に起因する地理的条件は、その時々の人々が活躍するための歴史的要因である中のひとつである。

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘状に位置している。

旧石器時代では、表探資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、1993年に調査を実施した向屋敷遺跡は、集石遺構と共にナイフ形石器やスクレイバーが出土している。

縄文時代の遺跡は、密度の差こそあれ、河川流域の小丘陵には必ずといってよいほど存在している。特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、柑橘栽培による遺構面の擾乱を受けることは少なく、残存状態も良好である。橋山第1遺跡・天ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の5遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第1遺跡は、早期と後期初頭の遺構遺物が検出された。早期は、幾形式かの集石遺構と、それに伴い、前半・窓ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして、環状石斧などが出土している。後期は、阿高系の岩崎式土器が出土してい



図版2 向屋敷遺跡



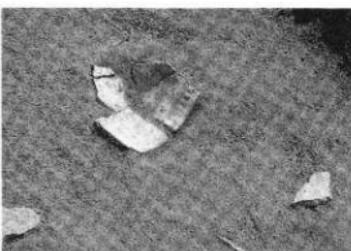
図版3 橋上遺跡

る。また、多くの石錐が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ヶ城跡は、標高120mの独立した丘陵に位置し、集石造構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。また、九州一円からの黒曜石やサスカイト製の製品が出土し、交易の広さを知る手がかりとなる。表探資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表探される。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。久木野地下式横穴墓群で3基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。東高岡地区の古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の釜と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き継ぎ集落が営まれている。それに隣接した八鬼遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言わされていた。古代になると、宗家司遺跡・蘇野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。蘇野遺跡では、9C後半の土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されているところである。繩張り調の成果として、南九州特有の特徴をもつとともに、機能文化をもたらした山城として評



図版4 橋山遺跡



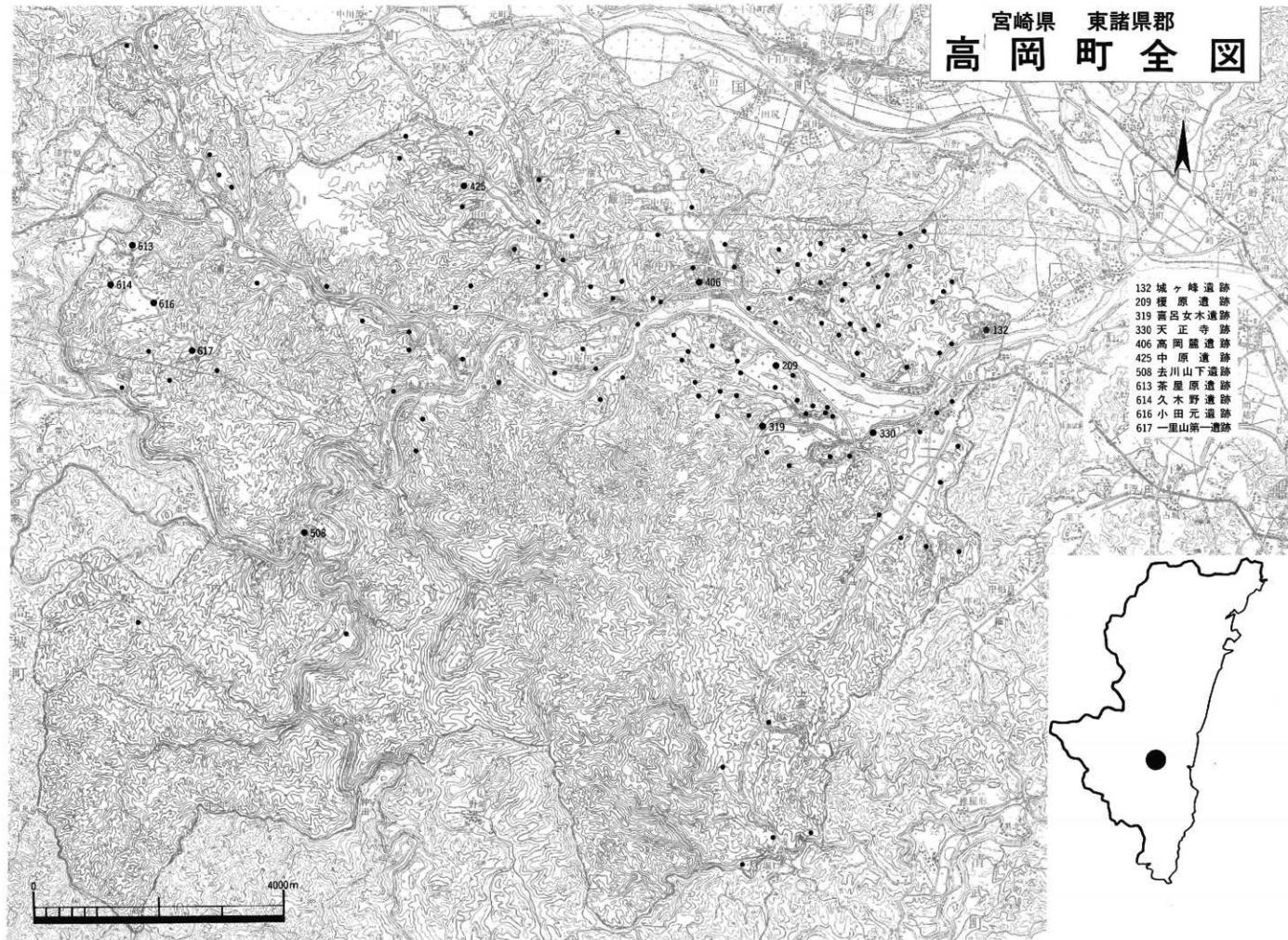
図版5 蘇野遺跡



図版6 穆佐城跡



図版7 高岡城跡第1地点



第1図 高岡町内遺跡分布図

価されている。その後、移佐城は、島津久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの衣舞台にあった。また、このころには、山城などの城郭遺跡以外でも町内全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地は移佐城周辺だったのでに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と移佐城（移佐郷）の領地に多くの郷士を居住させた。そして、綾・倉岡とともに閑外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防衛の要として発展する。高岡城跡では、計画的な街路設計がなされ郷土屋敷群と町屋群に分割されている。そして、第1次調査における町屋の調査で素掘の井戸や土坑等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。また今年度の県文化課による調査では、武家屋敷の一画を調査し陶磁器類を検出している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表探遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。

2. 調査の目的

a. 高岡の開発について

高岡町は、官崎市の近郊に位置しているにも関わらず大規模開発というものに縁遠いところである。地理的条件であるわりには、官崎市の南北に位置する佐土原町や清武町のようなベットタウン化されることなく、埋蔵文化財にいたっては残存している遺跡が多い。しかしながら開発が全くなかったわけではなく、確実に遺跡は破壊されてきたのである。まず戦後的小規模な圃場整備や1965年頃始まったパイロット事業、そして、国道10号線バイパスを始め各種の舗装道路、官公庁の庁舎建設、民間では、小規模な宅地造成や個人の農地造成、農作物の栽培での施肥やごぼうなどの深耕を必要とするもの。また、近世の中心遺跡の場所に教育委員会施設であるR・C構造の校舎建設がある。

これらの開発は、埋蔵文化財に対する保存の意識はまったくなく、あくまでも生活利益先行の結果である。これは、文化財保護法を施行させるための体制がなかったためで、官崎県内でそのような体制づくりがなされたのがひと昔前と考えれば、市町村レベルにおいての意識の低さは当然であろう。

さて、最近の町内の傾向は、まず、大規模開発は、ゴルフ場や工業団地造成などが計画されたが、民間開発のほとんどは法的規制や景気の低迷などで計画の見直しを余儀なくされている。小規模開発については、公共事業を中心毎年コンスタントに事業が計画されている。町の単独事業は事業費が少額で、地下構造に影響を与える内容の事業のほとんどは補助事業である。最近の傾向として農道関連の開発が増加している。個人住宅に関しては、震災の影響で鉄筋または鉄骨構造のものが増加するものと思われたが、今年度に限っては目立った増加傾向は示していない。しかしながら今後建造物の基礎強化により、地下構造に影響を与える工法が増加するものと思われそれらに対応するためのシステムの確立が緊急の課題であろう。

これらの開発に対しては、可能な限りの試掘と立ち会い調査で対応し、破壊される遺跡については本調査を実施している。しかし、これも事前に計画が確認できるものについてのみの対応であり開発のすべてではない。現在のところ特に小規模な民間開発においては把握するのは困難である。教育委員会で把握できるものは、開発申請や建築の確認申請、農地転用許可によるものであり、それ以外の開発は発見時での対応となり工事の中断・工期の延長を引き起こしている。公共事業においても計画段階で協議を求めてくるのは希望である。発掘調査が事業者側に課せられた義務であることを周知徹底させることと、開発に対する埋蔵文化財独自のチェック機構を早急に確立させることが必要である。また、仮にこのように開発の把握が可能になった場合、今の教育委員会の体制では対応することは困難であり、同時に受け皿の強化を図らなければなら

ず、広域的な調査協力やさらには現体制そのものの改革を必要とする時期がすでにそこまで来ていることに我々も気付かねばならない。

b. 今年度の開発事業における対応について

今年度は公共事業については、町や県事業における道路関係が中心で、諸施設建設については例年程度の規模でありトレンチによる確認調査を実施した。民間については、まず、宅地造成など宮崎市近郊であるが故の開発が目立ち始め、周知の遺跡のみトレンチ法による確認調査を実施した。個人住宅は、横ばい状態であるが、今年度の対応としては、部分的に発掘調査を実施した。

表-1 確認調査一覧表

| 遺跡名 | 原因 | 期間 | 成果 | 備考 |
|----------|--------|--------------|------------|----|
| 喜女呂木遺跡 | 町道改良 | 4/4 | 陶磁器 | |
| 高岡麓遺跡6地点 | 個人住宅 | 5/15~5/16 | pit 陶磁器 | |
| 小田元遺跡 | 農道新設 | 6/6・6/7・6/14 | pit 陶磁器 | |
| 久木野遺跡 | 農道新設 | 6/14~6/15 | | |
| 茶屋原遺跡 | 團体施設建設 | 6/15 | pit | |
| 去川山下遺跡 | 町営住宅建設 | 7/5~7/7 | 縄文式土器外 | |
| 一里山第1遺跡 | 農道新設 | 7/7 | | |
| 高岡麓遺跡7地点 | 学校施設建設 | 7/17~7/19 | | |
| 中原遺跡 | 農道新設 | 7/20・7/21 | 焼甕 | |
| 榎原遺跡 | 個人農地造成 | 10/25~10/30 | 縄文式土器 | |
| 天正寺跡 | 宅地開発 | 11/14 | | |
| 城ヶ峰遺跡第5 | 農道改良 | 11/22 | 土師器・縄文式土器外 | |
| 城ヶ峰遺跡第6 | 急傾斜対策 | H8.2/5 | | |

II 調査

1. 東高岡地区

a. 城ヶ峰遺跡

この遺跡は、高岡町の最東端の大淀川を東に臨む独立丘陵に位置する。宮崎県で初めて発見された貝塚である「花見貝塚」をはじめ、県指定の城ヶ峰古墳などの遺跡が立地する。過去、4箇所においてすでに発掘調査が実施され、縄文早期から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。今年度は2箇所で確認調査が実施され、それぞれ第5地点と第6地点とした。

第5地点

城ヶ峰の集落中央を走る道路の拡幅工事に伴うもので、1995年1月22日に調査を実施した。ここは現道を工事する際にすでに1m以上低く削平されており、路側壁面では至る所で土器が露呈している状態



第2図 城ヶ峰遺跡第5・6地点位置図

であった。調査はトレンチ法で実施し、今回の工事で削平をされるところのうち6箇所にトレンチを設定した。第3トレンチでは、表土0.2mほど下げるにアカホヤが確認され、そこを遺構面としてピットが数基検出された。他のトレンチでは、表土が1m以上もあり明確なアカホヤ面は確認されず、表土下は明褐色土層が確認され、縄文土器（早期）が出土した。土層の一部は第1地点と対応するものもあり、これについては本調査で明らかになるものと思われる。

第6地点

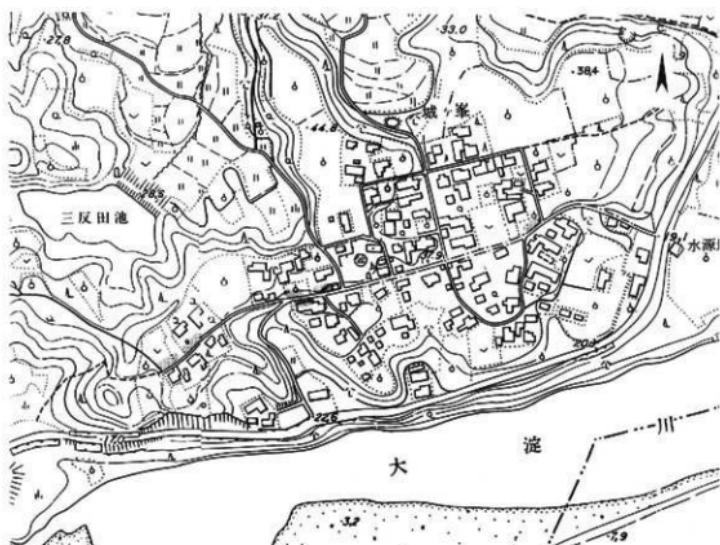
急傾斜対策事業に伴い緊急に対応したものである。事業は數カ年に及ぶもので、今年は事業の初年度にあたる。今年度は、崩落した部分の改修が主であったが、付近で以前に貝殻が土砂に埋まっていたという情報があったため、部分的にトレンチを入れて確認した。調査は1996年2月4日に実施し、これによる遺構や遺物は確認されなかつたが、来年度以降の工事では平坦地が面的に削平を受ける可能性があり、事前の協議が必要となる。（島田）



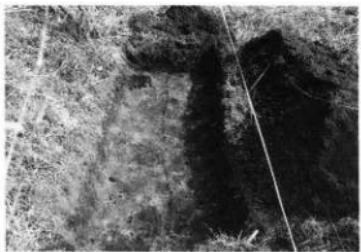
図版8 城ヶ峰遺跡遠景



図版9 城ヶ峰遺跡第5地点2Tr



第3図 城ヶ峰遺跡第5地点トレンチ配置図



図版10 城ヶ峰遺跡第5地点 3Tr

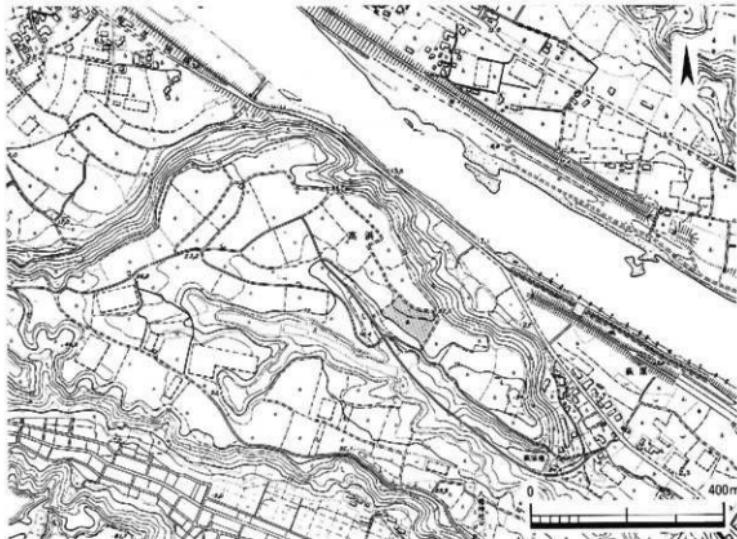
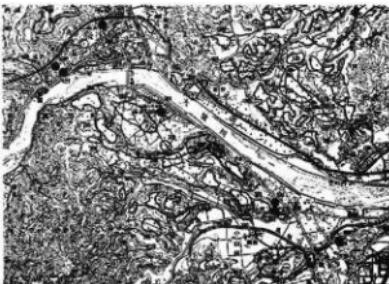


図版11 城ヶ峰遺跡第6地点

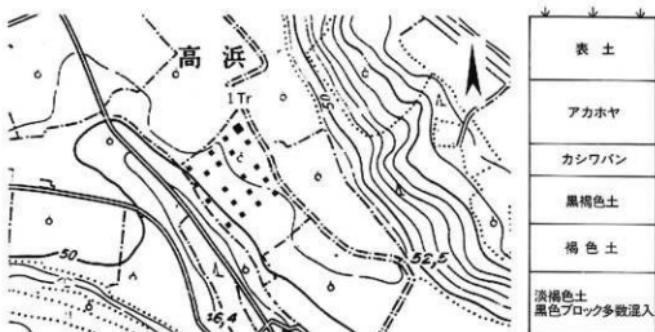
2. 高浜地区

a. 櫻原遺跡

埋蔵文化財のパトロール中に個人の土砂採取の現場を発見した。現場は周知の遺跡ではなかったが、櫻原遺跡や下原遺跡に隣接し、さらに現場からは1点の土師皿の破片が採取されたため、教育委員会は工事担当者や地主に対して事情聴取をおこなった。事業内容は農地を造成してビニールハウスを建てる計画で、約5,000m²にも及ぶもので



第4図 櫻原遺跡位置図



第5図 横原遺跡基本柱状図およびトレント配置図



図版12 横原遺跡



図版13 横原遺跡第1Tr

あった。すでに1,000m²は削平されていたが、残ったところの一部が横原遺跡に含まれることから、そこを中心に箇所のトレントを設定し遺構の有無を確認した。横原遺跡は大淀川を北に臨む丘陵に位置する。横山第1遺跡や熊野遺跡のある丘陵とは大淀川を挟んで対岸となり、鍋山遺跡や下原遺跡などが同じ丘陵上にある。トレントは、西側の一番高いところにある蜜柑園に4箇所（1～4Tr）、そして、20m前後のピッチで任意に設定し（5～20Tr）、1995年10月25日から30日まで調査をおこなった。第1Trでは第IV層の黒褐色から焼却痕数点と縄文土器（椎ノ原式）が1点出土した。他のトレントでは表土に流れ込みの状態で中世の土師器等が出土したが、遺構は検出されなかった。

（島田）

3. 穂佐地区

a. 喜呂女木遺跡

ここは小山田の平野部の南西に位置し、古代の土師器碗が表

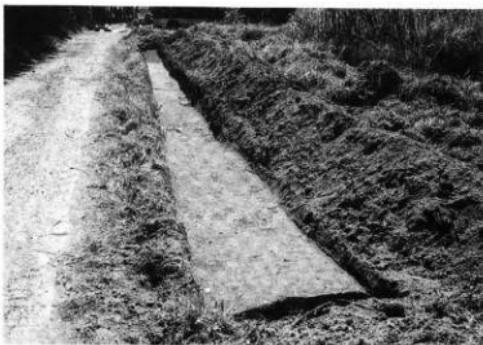


探できる低地遺跡である。調査は町道の拡幅改良を原因として、1995年4月5日に3箇所のトレンチを設定した。いずれも田の耕作土を剥ぎ暗青灰色粘土層が露呈したところで遺構の検出作業を実施したが、陶磁器片が3点出土しただけであった。

(島田)

b. 天正寺跡

民間の宅地開発業者から移佐城の東側数百mのところの迫地を宅地造成するとの届出があった。そこら周辺は天正寺跡と考えられており、



図版14 喜呂女木遺跡



第7図 喜呂女木遺跡調査地

『三国名勝図絵』によると、「龍虎山彌勒院天正寺地頭館より寅方六町許、小山田村にあり、本府大乗院の末にて、真言宗なり、本尊勝軍地藏、座像、長二尺二寸余、行基作、開山快空法印、當寺は、義天公、當邑御在城の時、祈願所として建立し、快空を開山とし玉へり、既にして、大岳公、御誕生ありて、益す敬禮を加へらる、又旧記に、龍虎山は、移佐城の鬼門に當り、乾方より坤方に縦続して、山形臥龍の状に類す、因て義天公の御威勢、龍の水に蟠まり、



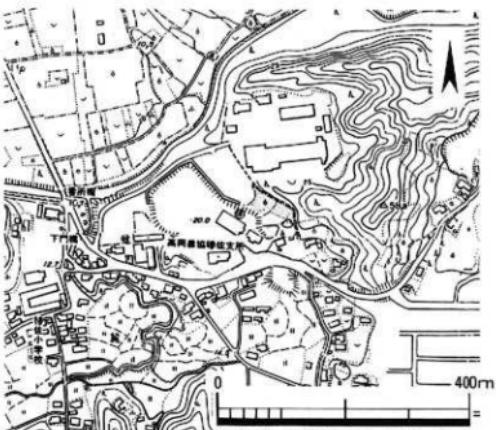
図版15 天正寺跡

虎の山に幕る勢に比し、龍虎と號すといへり、」とある。開発予定地はその西側で、調査は1995年11月14日に重機を使用してトレーニング状に実施した。結果、遺構や遺物は全く検出されず、天正寺は調査地の東側のすでに工場が立地する敷地内にあった可能性が高くなった。(島田)

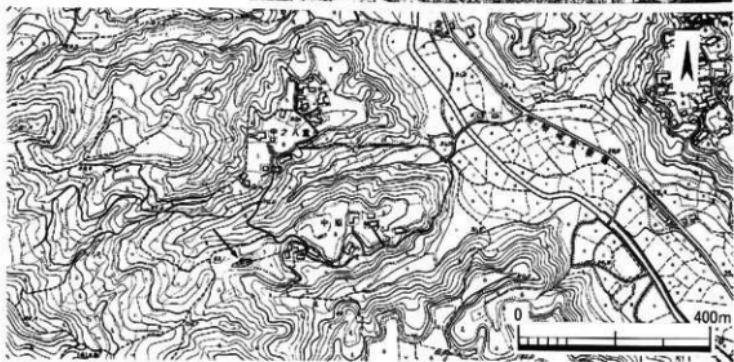
4. 去川地区

a. 去川山下遺跡（508）

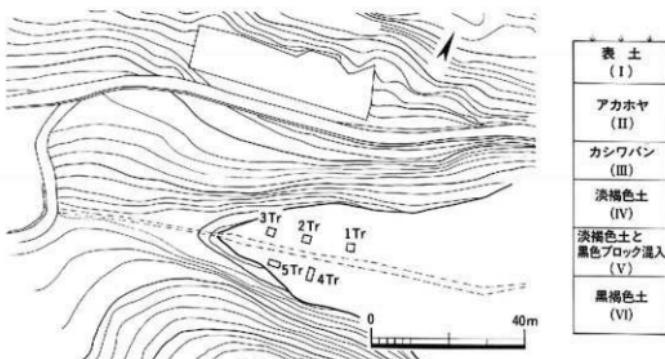
この遺跡は高岡町南西部の山間部に位置し、大淀川沿いに形成された舌状の平坦地に立地する。ここは、幕末に「御手山勘場」があったところで、そこから300mほど上流に行くと「去川の関」や国の天然記念物である「去川大銀杏」があり、周辺は近世には重要な拠点であったことがわかる。また、布痕土器が採取できる新保遺跡もこの東側上流にある。さて、この場所に町営住宅建設の計画が持ち上がった。ここは遺跡分布地図には周知の遺跡として表示されていないが、「御手山勘場」跡



第8図 天正寺跡調査地



第9図 中原遺跡位置図

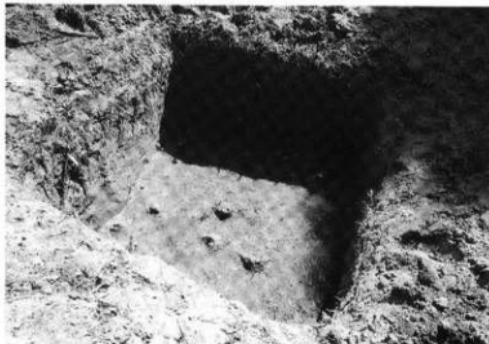


第10図 中原遺跡トレンチ配置図ならびに基本柱状図

であることがすでに周知化されていて、たため、確認調査を実施することとなつた。調査は、1995年7月5日から7日まで $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを14箇所設けて実施した。その結果、1Trから10Trまでは遺構や遺物が確認されたが、11Trから14Trまでは旧貯木場の埋め立て地であり、途中で打ち切つた。この遺跡の基本層序は、表土下は近世以降の遺構検出面に比定される暗褐色土（Ⅲ層）で、調査地の東側はその間に疊層（Ⅱ層）に入る。暗褐色土は20cmほどあり、その下に黄褐色土の弱粘性の層（Ⅳ層）と粘性の強い層（Ⅴ層）が堆積する。さらにその下には黄褐色砂性土（Ⅵ層とⅦ層）と黄褐色粘性土（Ⅷ層とⅨ層）が交互に堆積する。Ⅵ層とⅦ層において軽石が出土することから河川の氾濫の影響を多分に受けたものと解釈される。近世以降の遺構については、第1・2Trでピット並びに柱穴（根石を伴うもの）が検出されたが、詳細な時期は確認されていない。また、Ⅲ層以下は包



図版16 中原遺跡

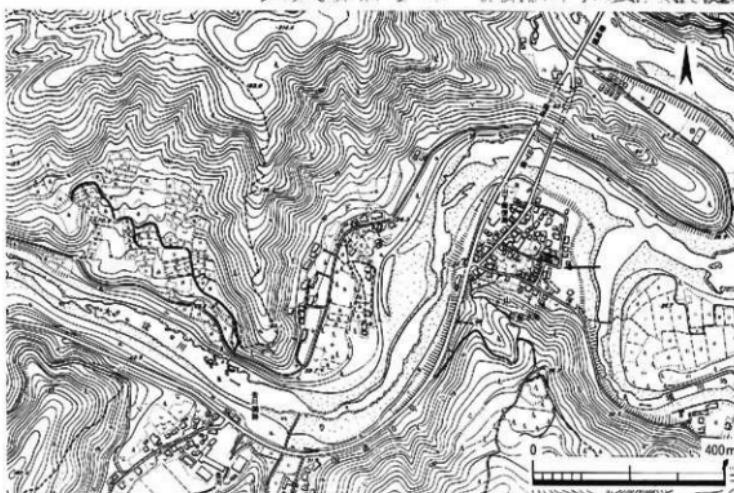
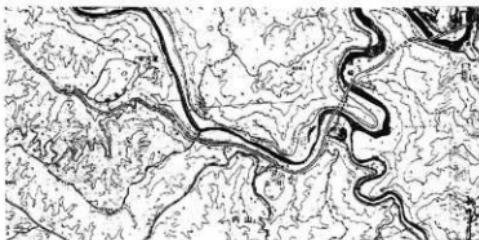


図版17 中原遺跡第2Tr

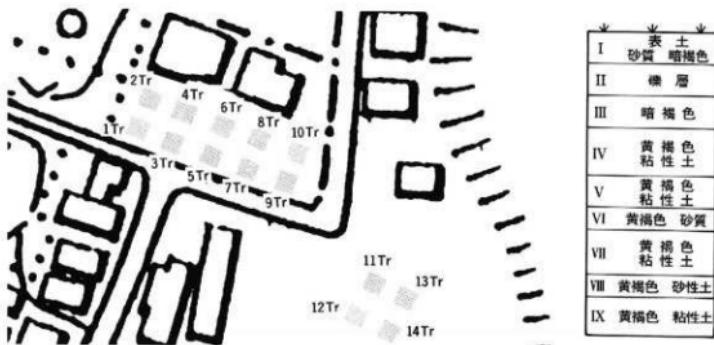
含層で何れの層からも土器の出土があったが、特にVI・VII層はその量が増加する。遺物は縄文式土器を中心であるが、第8Trでは土師器や布痕土器の出土もある。1は第3TrのV層から出土した。器形は口縁端が内湾気味となる縄文土器で、外側は口縁端部にへラ状工具による縱位の連続刺突文で内側は口縁端部に横位の連続刺突文を施す。調整は内側で貝殻条痕がみられる。色調は灰褐色で胎土に黒色光沢粒や透明光沢粒を含む。2は第6TrVII層から出土した。器形は口縁部が内湾するもので、外側は沈線文と連続刺突文を、口唇部に連続刻目を施す。色調はぶい黄褐色で胎土に黒色光沢粒や透明光沢粒を含む。3は第8TrIII層から出土した。内側に布目痕を持つ布痕土器である。色調は橙色で、胎土は赤褐色



図版18 去川山下遺跡



第11図 去川山下遺跡位置図



第12図 去川山下遺跡トレントレンチ配置図ならびに基本柱状図

色粒を含む。(島田)

5. 内山地区

a. 中原遺跡 (425)

中原遺跡は、農免農道予定地の分布調査を実施したところ、周辺で焼礫が数点露呈していた所があったため、急速確認調査を実施することとなった。ここは、彼町に抜ける県道358号線の西側、二反野原から東へ延びる舌状の痩せた丘陵に位置する。この遺跡の周辺には、同一開発事業で発掘調査を実施した旧石器時代の向星敷遺跡や、時代が新しいところで中世城館の椿

城などがある。調査は、

1995年7月20・21日に
2 m × 2 m のトレント
を5箇所設定し実施し
た。その結果、すべて
のトレントのⅢ・Ⅳ層
から焼礫や縄文土器
(桑ノ丸式・平格式)
が出土した。基本層序
は、表土下はアカホヤ



図版19 去川山下遺跡第6 Tr



第13図 去川山下遺跡出土遺物実測図

火山灰(Ⅱ層)となり、その下に淡青灰色土(Ⅲ層)、淡褐色土(Ⅳ層)、黒色土混じりの淡褐色土(Ⅴ層)、

黒灰色土（VI層）と続く。焼甕は、一部においては縁群となりうるよう密な出土状況であった。調査地は、幅20mから30mほどのやせ細った丘陵の山裾部分であり、向屋敷遺跡と同じ立地条件であることから遺跡の立地を考える上で重要である。（島田）

6. 浦ノ名地区

a. 茶屋原遺跡（613）

小田元遺跡、久木野遺跡の存在する台地の北に位置する周知の遺跡である。調査は、法人施設の建設に伴うもので、町道沿いにある建設予定地に3ヶ所のトレンチを設定した。トレンチの大きさは3m×6m程度で、重機によって掘削をおこなった。土層は、約2mの埋土の下、黒色土層、アカホヤ、カシワバン相当層、褐色土層であった。そのうちの1ヶ所のアカホヤ面でピットが検出された。アカホヤ上面の黒色土層は搅乱層であるが、ピット埋土には黒灰色土が確認された。しかし、時期は不明である。

b. 久木野遺跡（614）

小田元遺跡の北に位置する。小田元遺跡と同様に農道の新設に伴う調査で、6月に確認調査を実施した。



第14図 一里山地区遺跡周辺図



図版20 茶屋原遺跡



第15図 茶屋原遺跡位置図

町道から直角に延びる畠地の管理道路沿いにある畠地に6ヶ所のトレンチを設定した。トレンチの大きさは1m×2m程でおこなった。土層は、表土下、黒色土層、アカホヤ、黒色砂性カシワバン相当層、褐色土層、淡褐色土層、黄褐色土層であった。表土下約50cm程度でアカホヤ面が検出された。現在は谷状の地形であるが、アカホヤ面はおおよそ平坦であった。また、今調査においては、遺物は出土せず、遺構も検出されな



図版21 久木野遺跡



第16図 久木野遺跡位置図

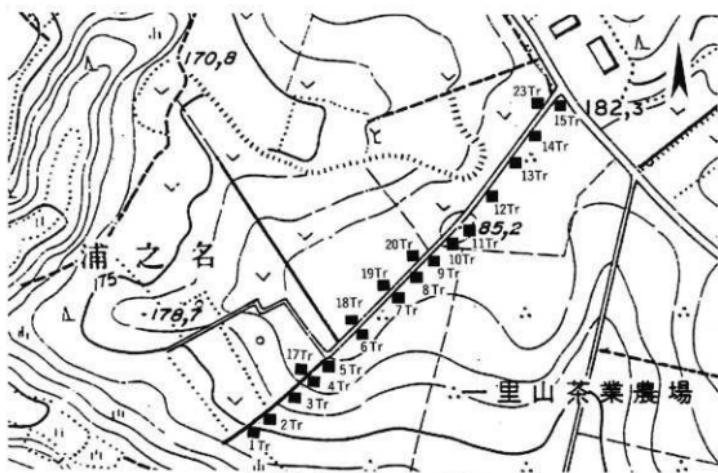
かった。

c. 小田元遺跡（616）

小田元遺跡は、高岡町の西端部に位置し、この遺跡が立地する台地には、なんらかの遺跡が存在する歴史の宝庫である。昨年度には、この遺跡の北側に広がる久木野遺跡内（614）で農道新設に伴う発掘調査が実施されている。そして、今発掘においても農道新設をおこなうため、6月に確認調査を実施した。調査地は町道より直角に入る茶園の管理通



第17図 小田元遺跡位置図

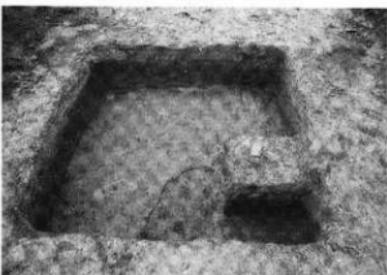


第18図 小田元遺跡トレーンチ配置図

路沿いで、管理通路の両側に合計23箇所のトレーンチを設置し対応した。層位は、表土下に褐色土層、アカホヤ、黒褐色カシワバン相当層、淡墨褐色土層となる。管理通路が上下2段に分かれている中、下段のトレーンチでは約20cmで、上段のトレーンチでは約30cm程でアカホヤ面が検出された。遺物は、アカホヤ面で縄文土器片が数点、表土中からは土師器が数点出土した。また、2ヶ所で落ち込み部分を検出したが、遺構になるかは不明である。

d. 一里山第1遺跡 (617)

過去、この遺跡は町道改良により確認調査がおこなわれていたところである。今回は農道新設を原因とし、確認調査をトレーンチ法により実施した。調査地周辺では焼窯や縄文土器が採取されたが、調査では遺構や遺物は全く確認されなかった。(今城)



図版22 小田元遺跡



図版23 一里山第1遺跡



第19図 一里山第一遺跡位置図

7. 飯田地区

a. 高岡城跡第6・7地点 (406)

高岡城の成り立ち

諸大名が戦国大名から近世大名へと変質していくために、兵農分離政策によって家臣団を常備軍化し、中世以来続く在地性を払拭していったということは周知のことである。それは、おおよそ家臣団の城下町集住という形でおこなわれたが、薩摩藩



第20図 高岡城跡周辺図

表-2 高岡城略年表

| | | |
|------|---------------|---|
| 1600 | 慶長5 | 義弘久津良の内山を城地に取立て城を天ヶ城と名づけ外城を高岡郷と号し関外四ヶ郷の本城となし日、薩摩三州の武士七百三十戸に移住を命じ、翌年に及ぶ。 初代地頭比志島紀伊守国貞 高岡郷は内山・浦之名、高浜・花見・飯田・向高・田尻・入野・八代北俣・八代南俣・深年の十二ヶ村。 高岡城山に鹿児島稲荷大明神を祠勧請す。 |
| 1621 | 元和7 | 高岡天ヶ城は廃城となり麓に聚落始る |
| 1676 | 寛文13 (延宝元) | 光久香積寺の梅を月知梅と命名、自筆の詩をおくる。河上篠右門久賢を訪問 外城を堀と改む。 |
| 1784 | 天明4 | 高岡名勝図および絵面、藩庁へ提出す。 |
| 1824 | 文政7 | 高岡練土館創建され藩主より金五十両寄付大迫元備・大坪貞国教授となる。 |
| 1852 | 嘉永5 | 高岡町末曾有の大火。 |
| 1858 | 安政5 | 高岡は美々津県、稚佐は都城県管内となる。 |
| 1871 | 明治4 | 美々津県参事橋口兼三都城参事桂久武 西南の役 |
| 1877 | 明治10 | 高岡小学校焼失 |

第21圖 高鐵鐵路附近地形圖



の場合は外城制度と呼ばれる独自の制度がとられた。「島津家列朝制度」によれば、外城とは、「御居城」としての「内城」に対して、その他の「外衛之城」はすべて外城としている。また、外城は郷とも呼ばれ、天明4年（1784）には外城を郷と呼ばせる法令が出されている。このように、他領のように武士の城下への集住が見られず、外城制度という特殊な制度がとられた背景には、島津氏が一時期九州全土を制圧していたにもかかわらず、秀吉の九州征伐以来2ヶ国半に領土を減少するにあたって、増えすぎた家臣団の整理ができなかっただことが考えられる。薩摩藩の領域には113の外城があるが、その外城の中でも高岡郷は最大級の外城であった。高岡郷の設置は閑ヶ原合戦直後の慶長5年（1600）で、「高岡名勝志」によれば、島津義弘が閑外の本城として久津良名と呼ばれる地に天ヶ城を命名し、外城として取り立てたのがはじまりとしている。設置にあたっては、伊楽院の99戸をはじめとして領内各地から516戸の郷士が移住した。閑外の郷ということと、佐土原へと通じる重要な街道筋に存在するということから、100石を超えるような禄高の高い郷士が多く集められている（「高岡町史」によれば100石以上の郷士が27軒存在する。）。通常ひとつの外城の中は、行政府である地頭仮屋、郷士の集落である麓、農民集落の在、漁民集落の浦、商人集落の野町に区分されている。地頭は通常鹿児島の城下士が任せられる。外城創設当初の



図版24 長野家武家門



図版25 本吉家屋敷内蔵



図版26 高福寺墓地



第22回 高田屋事件の説明

地頭は、任地において政務を指揮していたが、時代が下るにつれて次第に任地に赴かなくなつた。そこで、日常的には郷士年寄・組頭・横目という「所三役」と呼ばれる役人が置かれ、ほかの郷士役人を指図して郷の自治を取り仕切っていた。この「所三役」になる郷士の家格は近世を通じて決まっていたようで、高岡郷のことはわからないが、隣の移佐郷においては数軒の家によって占められていたようである。また、郷士の生活においては、藩より割り当てられる知行地からの収入がその主な経済基盤であるが、少祿の郷士などは、養蚕などの副業によってその生活を支えていた。知行地についても下人や小作人を使って大規模な農業経営をおこなっていた郷士はごく一部で、大部分の郷士が手作経営をおこなっていた。いずれにせよ、集住する郷士の規模から見れば高鍋藩城下町に匹敵するような大規模な麓の中で、祿高と家格による秩序を保ちつつ、ひとつの城下町として近世の間自治が行われてきたのである。(今城)

(参考文献)

永井哲夫「日向の近世期」(『宮崎県地方史研究紀要』第1号)

『日本の近世』8 村の生活文化

高岡麓の街路と屋敷割り

高岡麓は三方を山で囲まれ、残りの一方は大淀川に面し、地形的には防衛的要素を備えている。面積は約60ha以上、文字どおり天ヶ城の麓に拡がる近世の都市機能を兼ね備えた空間である。麓形成における街路設計は計画的である。街路設計は、天ヶ城の大手門と搦手門にそれぞれ通じる街路を3町の幅で平行に設け、それらの街路に直行するように街路を設けている。この街路は搦手門に通じる街路を2分割するところで直行し麓を天ヶ城側と大淀川側の二手に分ける。役場の正門前を走る街路がそれであり、西側に龍福寺西側の山頂を、東側には中山西側の山頂を望む。さらに役場と高岡小学校（地頭仮屋）の間にその街路に対して東



図版27 高岡麓遺跡中心部

に末広がりの状態で街路を設ける。この街路は薩摩街道といわれ、西側に先の街路と同じ龍福寺西側の同じ山頂を、東は丸山住宅団地奥の尾根頂部を望む。これらの4本の街路を基本としながら、さらに数本の街路を設け大街区を設定している。自然地形からの制約の中での最強の防衛としての街路設計と考えられるが、十字路がいたるところでみられ俗に言う袋小路的な街路は全く見られない。薩摩藩の東の守りの要、「門外四ヶ郷」の中心外城という緊迫感はさほど感じられない。

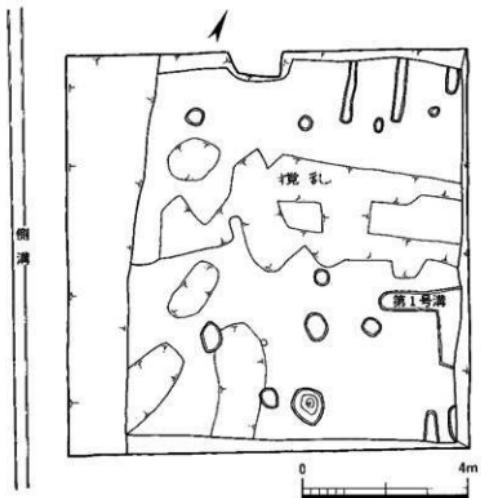
屋敷割は、地頭仮屋を中心に郷土屋敷が拡がり、天ヶ城の大手門から通じる街路沿いと大淀側周辺は町屋が拡がる。郷土屋敷は地頭仮屋周辺は敷地が広く離れるほど狭くなる傾向がある。また、町屋を挟むように大淀川河岸や飯田川周辺に、さらに高福寺（現内山神社周辺）山門前にも郷土屋敷が点在している。町屋は間口の狭い短冊形をなし、新町、上町、仲町、下町と呼ばれているところに集中して存在する。このよう



第23図 高岡麓遺跡第6地点屋敷割図



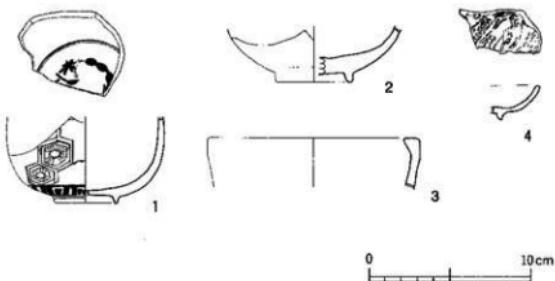
図版28 高岡麓遺跡第6地点



第24図 高岡麓遺跡第6地点遺構全体図

ろは、高岡小学校（地頭仮屋跡）から南西に150mほどのところに位置する高岡郷士[]敷地内である。

調査は、1995年5月15・16日の2日間実施した。まず、旧宅の解体後であったため重機による表土剥ぎをおこない、遺構の有無を確認し一部の遺構を掘削した。表土（I層）を剥いだところ、北側は、黄褐色粘性土（Ⅲ層）の最初の遺構検出面を確認した。南側は黄灰色砂性土の浅い整地層（Ⅱ層）が確認され、それを除去すると、やや南東側に下がり気味となるものの黄褐色粘性土（Ⅲ層）を遺構検出面として追うことができる。さらに黄褐色粘性土（Ⅲ層）を深さ20cmほど掘削すると暗黄褐色粘性土（Ⅳ層）となる。黄褐色粘性土（Ⅲ層）を遺構面とする遺構は第24図のとおりである。第1号溝は「L」字状に屈折し、東側は調査区外である。非常に浅く立ち上がりも鈍いことから自然流路的な性格のものであろう。柱穴による建物の位置



第25図 高岡麓遺跡第6地点出土遺物実測図

郷土屋敷群と町屋群は意図的に分けられたものと考えられる。

（参考文献）

土田光義「高岡麓の町屋と設計手法」

『能序藩領内の「麓」計画に関する研究』1992年

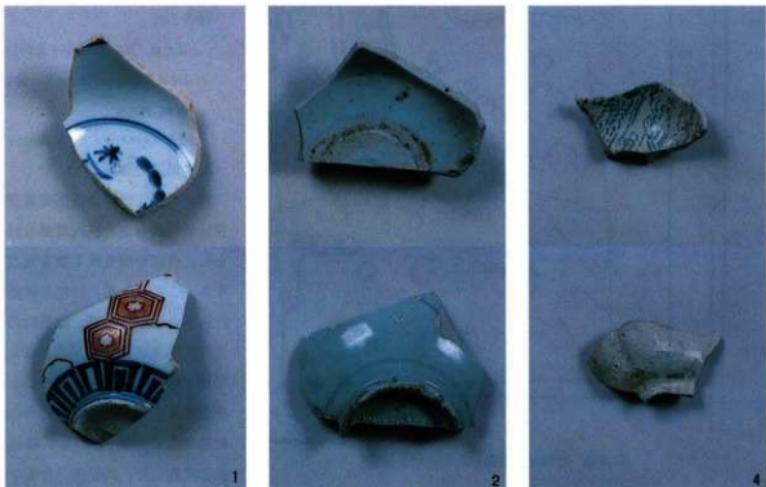
高岡町「高岡町史上・下巻」1987年

第6地点の調査

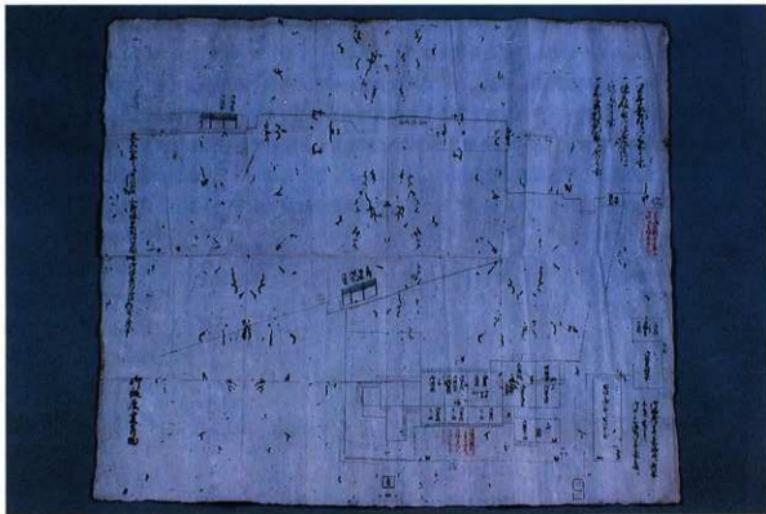
宮崎県文化課による高岡郵便局移転地の調査地を高岡麓第5地点とし、今回の調査地を第6地点とする。ここは、個人住宅の建設が計画され協議の結果、建築物の構造が鉄筋コンクリートによるもので地下道構に影響を与えることが予想されることから、建物の敷地面積である100m²を対象に確認調査を実施した。調査地となるところ

関係が把握されなかたため、第1号溝と建物との因果関係は不明である。柱穴は二段に掘り込まれ、その中央部分には小礫が数点確認された。建物の柱敷きに暗黄褐色粘性土（Ⅳ層）を遺構検出面とする遺構は径20cmほどのピットが数基確

認された。遺物は陶磁器が主で、黄褐色粘性土（Ⅲ層）に掘り込んだピットからは白磁の小杯（19C）、肥前系の染付碗が出土し、黄褐色粘性土（Ⅲ層）の整地層からは第25図の1～3が出土した。1は肥前系の色



図版29 高岡麓遺跡第6地点出土遺物



図版30 御仮屋敷図

縁の碗で外側は赤色で亀甲繋文が施され、内側は見込み辺りに松竹梅の文様が施される。胎土は灰白色、高台径3.9cmを計る。18C後半以後のものである。2は肥前系の染付碗である。胎土は明緑灰色で、高台径4.6cmを計る。1と同じく18C後半以後のものである。3は肥前系青磁の火入である。口径12.9cmを計る。18C代のものである。そのほかに、肥前系の刷毛目陶器の碗（17C後半～18C初）も出土した。黄褐色粘性土（Ⅲ層）の遺構検出面からは、薩摩系の土瓶や第25図4の肥前系小皿が出土した。4は内面に型紙摺で文様を施し、焼成不良の為か、くすんだ色調である。また、龍泉窯系の鎬蓮弁をもつ青磁碗が出土し中世の集落の存在も考えられる。このようなことから、遅くとも19C初めには整地がおこなわれ、その後に建物が建てられたと推定される。暗黄褐色粘性土（Ⅳ層）より以下については建物の基礎が及ばないため調査は実施していない。

第7地点

高岡小学校内の浄化槽の設置に伴い7月に確認調査を実施した。ここ周辺は高岡の地頭仮屋跡と言われているところである。調査地は校舎の裏側にあたり、天ヶ城からの支脈がすぐ側まで迫っている。調査は、表土が強固であったため重機を使用した。表土を剥いだところで淡青灰色土を確認したが遺構や遺物は確認されなかった。（島田）



図版31 高岡城遺跡第7地点



第26図 高岡城遺跡第7地点敷割図

表-3 高岡町内遺跡IV報告書登録抄

| | |
|--------|--------------------|
| フリガナ | タカオカチヨウナイセキ |
| 書名 | 高岡町内遺跡IV |
| シリーズ名 | 高岡町埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第11集 |
| 編集者名 | 鳥田正浩 |
| 発行機関 | 宮崎県高岡町教育委員会 |
| 所在地 | 宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887 |
| 発行年月日 | 1996.3.31 |

| フリガナ 所収遺跡名 | フリガナ 所 在 地 | 北緯 | 東 緯 | 調査機関 | 調査面積 | 調査原因 | 種 別 | 主な 時代 | 主な 遺構 | 主な 遺物 | 特記事項 |
|------------------------------------|---------------------|------------|-------------|------|-------------------|--------|-----|-------|-------|-------|------|
| キロメタ木 高岡町大字小山田字久保女木2906-1 | 高岡町大字小山田字久保女木2906-1 | 31° 62' | 131° 18' | 高岡町 | 30m ² | 町道改良 | 散布地 | 古代・近世 | 無 | 陶器器 | |
| タカオカチヨウ 高岡町大字張田字前田2544 第6地点 | 高岡町大字張田字前田2544 | 31° 62' | 131° 17' | 高岡町 | 100m ² | 個人住宅 | 散布地 | 中・近世 | pit | 陶器器 | |
| コモト元 小田元 | 高岡町大字油之名字久木野4911-1 | 31° 68' | 131° 15' | 高岡町 | 80m ² | 農道新設 | 散布地 | 古墳 | pit | 土器器 | |
| 久木ノ野 | 高岡町大字油之名字久木野4954 | 31° 83' | 131° 12' | 高岡町 | 30m ² | 農道新設 | 散布地 | 绳文・古墳 | 無 | 無 | |
| タケヤバ原 | 高岡町大字油之名字茶屋原5072-1 | 31° 86' | 131° 12' | 高岡町 | 150m ² | 团体施設建設 | 散布地 | 古墳 | pit | 無 | |
| サカタヤマシタ 去川山下 | 高岡町大字油之名字油跡3951 | 31° 72' | 131° 14' | 高岡町 | 60m ² | 町営住宅建設 | 散布地 | 绳文・近世 | 無 | 绳文式土器 | |
| イチリヤマダイイチ 里山第1 | 高岡町大字油之名字久元4900-53 | 31° 82' | 131° 12' | 高岡町 | 5m ² | 農道新設 | 散布地 | 绳文・弥生 | 無 | 無 | |
| タカオカチヨウ 高岡町大字張田字前田254-4 第7地点 | 高岡町大字張田字前田254-4 | 31° 71' | 131° 17' | 高岡町 | 150m ² | 学校施設建設 | 散布地 | 近世 | 無 | 無 | |
| ナカハラ原 | 高岡町大字五町字中座83423 | 31° 76' | 131° 15' | 高岡町 | 20m ² | 農道新設 | 散布地 | 绳文 | 無 | 烧器 | |
| ミキバ原 | 高岡町大字高須字下原1173-1 | 31° 91' | 131° 18' | 高岡町 | 80m ² | 個人農地造成 | 散布地 | 绳文・中世 | 绳文式土器 | 绳文式 | |
| テンショウジ 天正寺跡 | 高岡町大字小山田字天正寺26-2 | 31° 61' | 131° 61' | 高岡町 | 150m ² | 宅地開発 | 社守路 | 中・近世 | 無 | 無 | |
| ヨウカミキ 城ヶ跡 | 高岡町大字花見字東城池5434-2 | 31° 79' | 131° 20' | 高岡町 | 10m ² | 農道改良 | 散布地 | 绳文～中世 | 土器器 | 绳文式土器 | |
| ジタガミキ 城ヶ跡 | 高岡町大字花見字東城池5434-2 | 31° 86' | 131° 20' | 高岡町 | 5m ² | 急傾斜対策 | 散布地 | 绳文 | 無 | 無 | |

高岡町埋蔵文化財調査報告書第11集

高岡町内遺跡Ⅳ

1996年3月発行

発行者 宮崎県高岡町教育委員会
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
〒880-22 ☎ 0985-82-1111

印刷所 富士マイクロ株式会社
宮崎市船塚2-182-1 本村ビル1F
〒880 ☎ 0985-27-4068